

ポリスマガジン 07年5月号
『時事放談』
公共政策調査会理事長 山田英雄



憂えなければ備えなし

「憂えなければ備えなし」とは「備えあれば憂えなし」の逆説的発想である。つまり人間は「憂え」があれば、しかるべき「備え」をする。その「備え」が足りないのは「憂え」が希薄だからではないか、というのが私の考えである。

現下の深刻かつ重大な関心事、地球温暖化の問題ひとつ取って見ても、一方では車の排気ガス規制の必要性を叫びながら、少し寒ければ暖房、暑ければ冷房という生活スタイルは変わらず、言葉だけが独り歩きする。少子化が21世紀の日本の社会システムを崩壊させるかもしれないと言いながら、若者の恋愛観、結婚観は相変わらずで、両親から独立して一家を構え子供を育てるといふ、社会人としてはごくあたり前の「家族」を築くことの出来ない大人が増えている。「NBCテロに備えよう」と言いながら、いざと言う時の解毒剤、防護マスクは足りていない。

ことし3月、国際テロ組織「アルカイダ」の幹部で9・11米国同時多発テロの立案者と目されていたモハメド容疑者が在日本米国大使館の爆破テロを計画していた、という衝撃的な供述が公表された。昨年8月、英国で発生した旅客機爆破未遂事件では、アルカイダの教育を受けた英国人がテロに加わっていた。隣国、北朝鮮は日本海に向けてミサイル実験を繰り返し、核実験にも成功したと世界に宣言した。いまや、世界はテロとテロ支援国家の動向を、固唾を呑んで見守っている。国際テロは「ノット・ア・マター・オブ・イフ・バット・ウエン」(もしもではなく、いつ)という言葉通り。「もしも起こったら」ではなく「いつか起きる」という時代に突入しているのである。

日本人の多くは戦後61年間、平和な社会と豊かな暮らしを享受してきた。そして、その繁栄は日本人が戦争を放棄したお陰だと考えている人たちが圧倒的に多いのだ。経済的な繁栄だけをよりどころに、日本人は主張せず、何事にも世界と協調した。何も悪いことをしない日本人に、いきなりテロを叫ばれても俄かには、現実の問題として受け止められない。果たして、日本人は本当に「平和ボケ」してしまったのだろうか。それとも「日本人の戦後的感性の表れ」なのだろうか。

我々はいま、現実を受け入れ、真に「憂え」、正しい危機意識を持たねばならない。そのまた次のことは少なくとも心しておくべきだ。北朝鮮の金正日が自爆行為に出れば、日本の平和は一瞬にして吹き飛んでしまう。

日本人は過去の貴重な教訓に学び、情報を収集して、的確な判断のもと、遅まきながら組織的な訓練をする必要がある。そのためには、日本人を覆っている「戦後的感性」を払拭することが必要だ。いま、日本人としてやらなければならないことがある。それは、日本人一人一人にとり付いて離れない心の壁、平和ボケと戦後的感性からの脱却であり、真の「憂い」の気持ちを抱くことである。